

<前回>啓蒙主義と理神論

(1) 現代宗教論の前提としての近代

1. 近代の知的世界の状況が、以降の思想状況を規定している。
 ポスト近代という近代？
5. 近代とは：社会システム変動が現実性全般に及ぶプロセス
 キリスト教の普遍性あるいは合理性に対する根本的な問題提起
 社会統合の原理がキリスト教から次第に分離し、キリスト教の地位が相対的に低下する。
 キリスト教会→国民国家、神学→哲学→科学
7. 啓蒙主義の思想的意義：絶対主義批判、理性の自立性・人権、普遍主義、人間解放
 自由と自律(autonomy) → 国家と教会という他律的権威への批判
 啓蒙的理性の合理性と普遍性の主張

(2) 啓蒙主義的宗教論 (17～18世紀、イギリスからフランス・ドイツへ)

9. 理神論、キリスト教の合理化の試み → キリスト教の解体・宗教批判から無神論へ。
10. 宗教本質論として：信仰とは、信仰命題を真理として受け入れること。知的営み。
 ハーバード『真理について』(1624)：理性宗教(自然に備わった生得的なもの)

(3) 啓蒙主義の限界・問題性

11. 理性の普遍性と合理性
12. キリスト教あるいはキリスト教思想は、「近代」「啓蒙」に対して、どのような態度を取ってきたか、取り得るか、取るべきか。
 近代の推進者・共犯者としてのキリスト教／……
 ／近代の批判者としてのキリスト教／……
 ／反近代の代表者・原理主義者としてのキリスト教
 ↓
 近代は、キリスト教にとっての危機か、あるいはチャンス(危機におけるチャンス)か？
 成熟した社会(成人した世界)におけるキリスト教(ボンヘッファー)とは？

3. ニュートン主義の自然神学

1. 17世紀のイギリスの状況

ガリレオ(Galileo Galilei, ユリウス暦1564年～グレゴリオ暦1642年)とニュートン(Issac Newton, グレゴリオ暦:1643年～1727年)という二人の巨人が活躍した17世紀は、科学革命の世紀、近代科学誕生の世紀であるが、同時に、それは、政治的また経済的な混乱の世紀であった。近代社会を特徴づける諸制度は17世紀イギリスに誕生し、18世紀に定着してゆく。この意味で、17世紀イギリスは近代社会の母体であり、実験場であった。近代科学も、この17世紀の歴史的状況と密接に関わりながら、誕生したのである。今回は、近代科学とキリスト教との関わりを、以上の点に留意しつつ、ニュ

ートンとニュートン弟子たち（ニュートン主義者）に焦点を合わせて、考えてみたい。

17世紀イギリスの争点

政治：絶対王制／共和制、ピューリタン革命と王政復古、名誉革命

王党派と議会派

経済：封建的経済秩序／資本主義・市場経済

宗教：イギリス国教会／ピューリタン右派から中間派、そして左派

なお、こうした17世紀の状況を理解するには、16世紀のイギリス宗教改革の特性とその後の歴史を念頭に置かねばならない。

上からの宗教改革、カトリックとプロテスタントの中間（中道あるいは中途半端）

宗教改革・国教会→カトリック→国教会→国教会とピューリタンとの対決

(1) 科学革命とキリスト教

2. イギリスにおける近代科学の形成とキリスト教との深い関連については、これまで多くの議論がなされてきた（西欧に近代科学が誕生したのは偶然か必然か、東洋に近代科学が誕生しなかったのはなぜか）。とくに、有名なのは、次のマートン・テーゼである。

マートン・テーゼ：キリスト教（とくにプロテスタント・ピューリタニズム）は近代科学の形成に積極的かつ実質的な寄与を行った。王立協会の初期のメンバーの多くはピューリタンの信仰の持ち主であった。

ニュートンは政治的には、強硬な絶対王制と極端な共和制の中道（穏健な王制）の支持する立場にあったが（政治家ニュートン）、その点で、信仰的には国教徒（実は、アリウス主義者）であったニュートン（科学者であると同時に熱心な宗教者、神学者ニュートン）は、穏健なピューリタンと思想的に一致できた。マートン・テーゼは、まさにニュートンとニュートン主義者によく当てはまると言える。

3. ニュートンがその代表的実例として挙げられるように、17世紀において科学者であることと宗教家であることとは矛盾したことなく、キリスト教信仰と科学的思考とは、むしろ緊密な関わりにあったのである——「科学と宗教の対立」図式は、啓蒙思想以降の産物——。

しかし、ここで留意すべきは、信仰と密接に関連していた科学は、現代人がしばしばイメージするような価値中立的な客観的なだけの営みではなく、むしろ、穏健な王制・国教会体制を擁護するという機能を有するいわばイデオロギーとしての科学なのである。ニュートンとニュートン主義者は、最新の科学的知見（新科学）によって、無神論的思想傾向を含む論敵（右と左の）たちを合理的に論駁することを目指した。混乱の17世紀にあって、新しい市民社会的秩序へのソフトランディングするという課題に対して、「科学」は重要な役割を担っていたのである。

イデオロギーとしての科学、論敵を合理的に論駁するレトリックとしての科学

(2) ニュートンとニュートン主義の自然神学

4. 17世紀までの多くの科学者にとって、自然探究は、神の創造の偉大さを讃美すること（＝宗教的業）であり、ニュートン科学は、無神論論駁という意図と結びついていた。

その意味で、ニュートンにおいて、自然科学と神学は一つの知的宇宙に属していたのであり、この知的宇宙の要にあったのが、自然哲学と自然神学だったのである——中世における自然神学の役割と比較せよ——。

こうしたニュートン像が一般に知られるようになったのは、1970年代以降の新しいニュートン研究の進展によって可能になった。従来は、利用できなかったニュートンの膨大な未刊行草稿——アリウス主義という異端的信仰を隠すために生前は公にされず、また死後も処分されるはずであった。ガリレオ裁判の影響は、17世紀の思想世界に大きな影を落としていた——に基づく研究は、啓蒙以降、定説のあった実証主義的機械論的な科学者ニュートンというニュートン像を大きく変更させるものとなった。

ニュートン研究の進展 → ニュートンの知的世界の全貌

自然科学／自然哲学／自然神学／歴史神学／聖書解釈

I. Bernard Cohen & George E. Smith (ed.), *Cambridge Companion to Newton*, 2002.

Newton's alchemy (Karin Figala), Newton on prophecy and the Apocalypse (Maurizio Maniani), Newton and eighteenth-century Christianity (Scott Mandelbrote)

5. 「我々が適切な注意を払わねばならない事実は、物理学や数学の諸問題は17世紀のたいていの人々にとって最大の関心事ではなかったし、またそれらはニュートン自身にとっても最大の関心事ではなかったことである。ニュートンは錬金術、教会史、神学、預言、古代哲学、そして「古代王国の年代誌」により多くの時間を費やしたのである。」(Dobbs&Jacob, 1995, p.7)

「神が創造した宇宙の究極的な秘密を解き明かしたと人が信じることとそれを疑うこと、メシアであることとある者が塗油によって聖別された者であること[キリスト性]に疑念をもつこと。それは預言者の宿命である。自分が神より選ばれた者であり、奇跡的に守られているのだというニュートンの信念には、自分が無価値であり、御父である神の怒りを買うのではないかという恐怖が付きまとっていた。このことは、世界の偉大な天才の一人を、その苦悩する偉大な人間の一人にも仕立て上げたのである。」(マニュエル、33頁)

6. 以上の点に留意するならば、ニュートン神学を主著『プリンキピア』から読み取ることにも不可能ではない。とくに、総注に注目すること。

「この至高の存在者は、宇宙靈魂(anima mundi)としてではなく万物の主(universorum dominus)としてあらゆる事物を統治する。そしてその支配のゆえに、主なる神(dominus deus)、パントクラートルと呼ばれるのが常である。というのも、神とは相対的な呼び名であって、それは僕(servus)に関連しているからである。そして神性とは、神を宇宙靈魂とする者が夢想するような、神の支配が神自身の身体におよぶことではなく、僕におよぶことだからである。」(Newton, Principia, p.760)

7. 『プリンキピア』の神学

①パントクラートルあるいは主という言葉遣い、あるいは神の統治や支配の強調

ニュートンの神概念は、世界の強力な支配者と統治者としての神であり、宇宙靈魂といった汎神論的な宇宙原理ではなく、人格的な存在者(人格神)であり、宗教改革者における神の絶対的主権の思想(ルターの神の独占活動性の議論、Alleinwirksamkeit Gottes)との類似性を読み取ることには困難ではない。ニュートンにおいては、この神理解は、さらに、中世後期の唯名論・主意主義を経由して、古代のアリウス主義に至るのである。

②無神論論駁のための神の存在論証

「この太陽、惑星、彗星の壮麗きわまりない体系は知性的で力ある存在の思慮と支配から発した以外には考えることができない」(ibid., p.760)とあるように、「知性的で力あ

る存在者」は、近代科学がその法則性を解明した「太陽、惑星、彗星の壮麗きわまりない体系」との連関で登場する。これは、伝統的な自然神学における「意図（デザイン）からの神の存在論証」を継承したものであり、自らの最新の科学的知見に基礎づけられた神の存在論証によって無神論を反駁するという企てに他ならない。ニュートンのデカルト批判もこの文脈に位置づけられる。

③自然哲学とその神学的根拠

「確かにわれわれは実験に反して空しく夢想に耽ってはならないが、自然の類比 (analogia naturae) から離れてもいけない。なぜなら、自然は単純 (simplex) であり、常にそれ自身と一致しているからである」 (Newton, Principia, p.553) とあるように、ニュートン科学は、いわゆる実証主義と解することはできない——現代科学においても、自然の斉一性は前提とされている——。こうした自然哲学的前提は、さらにその根拠を知性的で力ある神の支配にもつのである。

8. 二つの自然哲学：機械論的と錬金術的

ニュートンを有名にしたのは、『プリンキピア』『光学』などの物理学的著作や微積分法の発見 (ライプニッツとの先取権論争) といった数学的業績によるものであり、とくに、『プリンキピア』との連関で、ニュートンの知的世界が機械論的な自然哲学を含んでいったことはよく知られていた。

しかし、最近のニュートン研究は、ニュートンが錬金術者でもあったことを明らかにした——友人である科学者ボイルも同様——。これは、ニュートンの知的世界には、一見すると相容れない二つの自然哲学、つまり、機械論的自然哲学と錬金術的自然哲学とが並存していたことを意味している。精神分裂に陥ることなく、どうしてこのようなことが可能だったのか。17世紀から18世紀へと進展する近代科学史は、機械論が錬金術を非科学的として駆逐する過程と解することができるかもしれない——これが論理的科学的な論駁であったかは別問題である——。

機械論的自然哲学：物体、もの。受動的な自然 (外力なしに運動状態は変化しない)

錬金術的自然哲学：生命、物質。能動的な自然

9. ニュートンの歴史研究とキリスト教史・聖書解釈

しかし、ニュートンの知的宇宙は、以上の二つの自然哲学に止まらない。むしろ、その半分以上占めていたのは、広範な歴史研究 (古代の年代記など) と聖書解釈 (とくに、黙示文学) を含むキリスト教思想史研究 (とくに、アリウス主義との論争において成立する三位一体論の形成過程に関わる諸教父の思想) だったのである。その驚異的な広がりや原典による精密な読解という点で、ニュートンはまさに一流の神学者であり、まさに、知的巨人と呼ぶに相応しい天才的な思想家である。

10. 主なる神の支配とその秩序 (自然と歴史の全体)

以上の驚くべき知的宇宙が解体することなく保持されたのは、ニュートン神学を特徴付ける神理解、つまり、自然と歴史の全体をその強力な支配において保持する神という思想であり——いっさいは同一の神の支配においてそれ固有の位置を与えられ統合される——、論理において全体を結びつけていたのは、先に指摘した自然神学だったのである。

11. イデオロギーとしての自然神学・自然科学

ニュートンの神学思想は、生前は、そして最近まで、その全貌において知られることがなかったが、彼の無神論論駁という意図と結びついた自然科学論は、弟子たちによつ

てより積極的に展開され、ニュートン主義の普及がなされた。

とくに有名なのは、科学者ボイルの遺産によって開催されたボイル講演における一連の講義であり、そこにニュートン主義の自然神学・デザイン神学(Design Theology)を確認することができる。

12. ボイル講演：講演者には、ニュートンの弟子たち（ベントリー、デラム、クラークら）が多く選ばれた。
13. ニュートン主義の自然神学・デザイン神学
 - 1) 世界における見事な秩序・法則
 - 2) 偶然ではない
 - 3) デザイナーとしての神の存在
14. このニュートン主義の自然神学は、進化論の登場まで、その説得力を保持していた。しかし、進化論によっても、この自然神学の伝統は消滅したわけではなく、近年、いわゆる宇宙論における「人間原理」の提唱によって、再登場してきている。
15. 共和主義と無神論（唯物論）との連合体に対する、王制と国教会連合という図式。

この図式は、国教会体制において典型的に見られるような、神と王との相補的關係づけを念頭に置かならば、理解困難ではない。ここに成立する神学は、古典的な政治神学に他ならない（カール・シュミットの言う政治神学）。神の否定は王の否定（無神論者は共和主義者であり、王制を否定する）に通じており、その逆も成り立つ。

したがって、無神論の科学的論駁は、王制擁護という機能を果たすことになる。

<参考文献>

1. Newton, Isaac (1726), Alexandre Koyré and I. Bernard Cohen (ed.), *Isaac Newton's Philosophiae Naturalis Principia Mathematica. The Third Edition (1726) with variant readings. Volume II*, Cambridge University Press 1972.
(ニュートン「自然哲学の数学的原理」河辺六男責任編集『ニュートン』（世界の名著31）、中央公論社、一九七九年。)
2. 芦名定道 『自然神学再考——近代世界とキリスト教』晃洋書房。
3. リンドバーク／ナンバーズ 『神と自然』みすず書房。
4. A. E. マクグラス 『科学と宗教』教文館。
5. マーガレット・ジェイコブ『ニュートン主義とイギリス革命』学術書房。
6. フランク・E. マニユエル 『ニュートンの宗教』法政大学出版局。
7. ウェストホール 『アイザック・ニュートン I, II』平凡社。
8. アレクサンドル・コイレ『閉じた世界から無限宇宙へ』みすず書房。
9. 佐々木力 『近代学問理念の誕生』岩波書店。
10. Dobbs&Jacob (1995) : Betty Jo Teeter Dobbs and Margaret C. Jacob, *Newton and the Culture of Newtonianism*, Humanities Press.
11. B.J.T.Dobbs, *The Janus Faces of Genius. The Role of Alchemy in Newton's thought*, Cambridge University Press, 1991.
12. 藤井清久『歴史における近代科学とキリスト教』教文館。
13. 佐藤文隆 『科学と幸福』岩波書店。
『量子力学のイデオロギー』青土社。
14. Gross, Alan G. (1990), *The Rhetoric of Science*, Harvard University Press.